

リズムカルな訳文で読ませる好小品

甘耀明著／白水紀子訳
冬將軍が来た夏



四六判 412頁
白水社
[本体 2,400円 + 税]

垂水 千恵

活中の祖母と5人の老女。台中を舞台に繰り広げられる、ひと夏の愛と再生の物語。

大河巨篇『鬼殺し』で好評を博した、台湾の若手実力派作家、甘耀明の最新作。台中を舞台に、身寄りのない老人など社会的弱者に着目し、主な登場人物は全員女性という新境地となる長篇小説である。

主人公の「私」は、大規模な幼稚園に勤める二十代の女性保育士。ある年の夏、十数年音信不通だった祖母が、私に会いにやってきた。末期の肺がんに冒された祖母は、気がかりだった孫娘に、死ぬ前に会う責任があると思い、自らが営む小型の共同ホームの老女たち五名と老犬一匹と共に私の家に姿を現した。ちょうどその時、私は自宅で幼稚園

レイプ事件で深く傷ついた私のもとに、突然あらわれた終

の園長の息子にレイプされ、祖母は唯一の目撃者となる。私の心は傷つき、園長の息子を告訴し、幼稚園を退職、祖母を含めた共同ホームの老女たちと行動を共にするようになる。祖母の終活に寄り添いながらひと夏を過ごした私は自己回復していく……。

幸いに書評子は訳者白水紀子氏にご恵投いただいたおかげで、この紹介文を目にする前に、この作品を読むことができました。何とんでもそのことに感謝します。設定を現代台湾に移して、甘耀明ワールドが大展開しています。甘耀明三作目の翻訳となる白水紀子氏の訳文も小気味よいリズムで快調です。方々にあつと驚き、ぐつと胸を打たれるエピソード（犬の名前が鄧麗君であることを含め）が満載です。作品の最初の山場は、祖母の登場シーンです。紹介文にもありますね。「突然あらわれた終活中の祖母」、この場面がすばらしく、またあつと驚くその登場の仕方は最後の山場にもつながっています（この部分をネタバレした書評もありますが、それはあんまりでしょう。本来ならば「終活中」などという表現も使って欲しくないくらいです）。

正直ありえないような設定です。寺山修司的シニールと言いたいくらいです。やはりそこがマジックリアリズムを得意

とする甘耀明の甘耀明たるところででしょうか。しかし、『鬼殺し』の台湾版金太郎たる「帕^パ」や、その養父・鹿野中佐の設定に比べると、まだしもあり得るかも？と思わせるところはあります。何とんでも、帕ときたら、小学生にして蒸気機関車を止めるほどの怪力の持主、鹿野中佐は鹿の腹を自ら掻き切つて生まれて来た鬼軍人です。それに比べれば、** **（あえて伏字にします）の中に身を潜めて孫娘の危機を救う祖母、は彼女の特技とされる縮*功と言う技が実在するということから考えて、『鬼殺し』以上に虚実皮膜の域に達していると言つていいでしょう（YOUTUBEにはその縮*功なるもの実演の様子がアップロードされています）。この部分は素直に甘耀明マジックに酔いしれてください。

ただ、『鬼殺し』ファンの書評子からすると、今回の『冬將軍が来た夏』は『鬼殺し』ほどは100%甘耀明ワールドを楽しめなかつたことも事実です。ずっとその理由について自問してみたのですが、「虚」にはいけない設定をストーリー展開の大前提として使っているからではないかという結論に至りました。小説は次のような一文から始まります。

私がレイプされる三日前、死んだ祖母が私のところに戻つて来た。

主人公の「私」は勤務先の幼稚園のパーティーで人事不省になるほど酔っ払い、経営者の息子唐景紹の車で送られて帰宅します。(この名前、最後の台湾巡撫でほんのわずかな期間台湾民主国總統となった唐景崧を思い出しますが、偶然でしょうかね?) 「彼は私を支えてマシヨンのエレベーターを上り、私のバックからタグ式のICキーと鍵を取り出して」私を家の中に入れます。そして私は「いったい抵抗したかどうかもはっきりしない」状態でレイプされてしまうわけですが、正直この設定には共感できません。もちろん、「私はやめると言い」、それを誰も想像のつかないような形で祖母が聞いていた(「唯一の目撃者」ではなく、「聞いていた」のです)、というのがこの小説の「肝」ではあるのですが……。

また、その後、「私」はお決まりの警察・検事による聴取によって二次レイプを体験します。さんざん警察内をたらいまわしされた後、女性警察官とカップ麺を食べるシーンなどユーモアたっぷりです。「こちらは私の廟、よろず神様がそろっていますよ。廟の門を開け!」と言って女性警察官が開けたロッカーにありとあらゆるカップ麺が並べられているシーンは秀逸です(ちなみに書評子の知人も、台湾旅行中落とした物をして訪ねた警察署でおにぎりを勧められたそうで、感激していました)。が、それもユーモラスに描くべきものなのか、どう

も違和感が残ります。

ユーモアと言うか、ブラックユーモアと言う意味では、娘のレイプをネタに、園長と取引をする母親も登場します。笑えると言えば笑えるのですが、書評子の笑いはこわばったものでした。さらにネタバレになりますが、最後に、「私」の仇を取ってくれるのは、彼女になついていた幼稚園児「小車」です。「小車」の描写は本当にすばらしく、最後の逆転劇も爆笑ものですが、それも背景にあるのは幼児への性的虐待ですから、まじめな書評子としては痛快に笑い飛ばす、というわけにはいかないのです(最近日本でも類似の事件が報道されました。たまたまその番組を見ていた書評子は、真偽のほどはさておき、番組の中で報道された幼稚園経営者の母親と息子の関係が、『冬將軍が来た夏』の園長親子に酷似していることに驚きました)。

もちろん、それが作者甘耀明の狙うところであれば、致し方ないところでしょう。『鬼殺し』では、植民地統治、侵略戦争すら笑ってのけた甘耀明なのですから、レイプあり、幼児への性的虐待ありの「セレブ」幼稚園を徹底的に風刺するブラック小説、という路線もありかもしれません。

しかし、それにしても全編に漂うほんわかムードはどうしたものでしょうか。前述の紹介文は以下のように締めくくられています。

女性問題、独居老人、同性愛など、現代の台湾社会が抱える問題を捉えつつ、著者のまなざしは、社会的弱者の心を温めて、生々をいろどる「記憶」に注がれる。それが厳しい現実を生き抜く支えになるというメッセージをユーモア溢れるタッチで描いた傑作。

また、白水社版では「人生を癒す終活小説」というタイトルさえついています。

確かに全編「社会的弱者の心を温めて」くれる「癒し」に溢れています。特に第二章で描かれる「七人の女と一匹の犬」はすばらしく、映画化されたらどんなにいいかと思えます。思うけれども、「癒し」の前提としてレイプや幼児への性的虐待という設定を使う必要があったのか、というのが書評子の最大の疑問であり、違和感の正体です。それはやっぱり「ユーモア溢れるタッチ」で描いてはいけない題材なのではないかと融通の利かない書評子はいけません（褒めるつもりで引き受けた書評だったのですが、結構辛口になってきました。甘耀明さん、白水紀子さん、白水社の杉本貴美代さん、ごめんなさい！ 甘さんの絶えることのない創造力、白水さんのいつもながら的確な訳文、そして杉本さんの台湾文学への深い愛情、心から敬愛しております。なのに、どうしたのでしょうか？ 唐景紹の邪悪さが乗

り移ったのかもしれませんが。絶交しないでください！）。

が、居直って、最後にもう一点文句をつけまます。紹介文にもある同性愛の登場のさせ方です。これもネタバレになりまますから、誰が、ということは言いますまい。しかし、彼女（たち）が同性愛である必然があるでしょうか？ 最近、これと同じような同性愛者の登場のさせ方を見たことがあります。台湾の大ヒットメーカー魏徳聖の最新作『52Hzのラヴソング』です。

そういえば甘耀明と魏徳聖にはある種の共通点がありません。一九七二年、六九年と親世代ですら戦前の記憶をもたない第三世代（赤松美和子「台湾ポストニューシネマの日本表象」『日本台湾学会報』第15号）でありながら、植民地時代台湾の記憶を扱った大作『鬼殺し』、『セデックバレ』を発表した点。そしてその後、舞台を現代に移し、「人生を癒す」小品に向かったこと。いみじくも魏徳聖は野嶋剛氏へのインタビュに対して「この映画（52Hzのラヴソング）は、都市に生きる孤独な人たちが、どうやって愛情を見つけるのか、決して一人ではないことを信じられるようになるのか、考えてもらいたい」と思って撮りました」と語っています。（<https://www.nippon.com/ja/column/g00473/?pnun=2>）

それはそれでいいのです。でも、どうしてそこに、一皿料

「王羲之書法の残影―唐時代への道程―」

会期：二〇一九年一月四日(金)～三月三日(日)

(前期：一月四日～二月三日、後期：二月五日～三月三日)

※月曜休館(祝日の場合は開館、翌平日が休館)

会場：台東区立書道博物館(JR鶯谷駅北口 徒歩5分)

開館時間：9時半～16時半(入館は16時まで)

入館料：一般五〇〇円、小・中・高校生二五〇円

※障がい者手帳をご提示の方は無料。

みどころ：王羲之筆「黄庭経」(通期)、智永筆「真草千字文」(通期)、

「仏説菩薩藏経卷第一 残卷」(前期)、「王勃集卷第二十九

残卷」(後期)などを展示。

※運動企画：東京国立博物館でも東洋館8室にて同時開催。

「顔真卿 王羲之を超えた名筆」

会期：二〇一九年一月一六日(水)～二月二四日(日)

※月曜休館(祝日の場合は開館、翌平日が休館)

会場：東京国立博物館(JR上野駅公園口、または鶯谷駅南口下

車 徒歩10分)

開館時間：9時半～17時(入館は16時半まで)

入館料：一般一、六〇〇円、大学生一、二〇〇円、高校生

九〇〇円 ※中学生以下、障がい者手帳をご提示の方は

無料。

みどころ：虞世南筆「孔子廟堂碑」、歐陽詢筆「九成宮醴泉銘」、

褚遂良筆「雁塔聖教序」、顔真卿筆「千福寺多宝塔碑」、

米芾筆「草書四帖卷」(重文)などを展示。

※「白磁の誕生と展開」(東洋館5室)…四月二一日(日)

理に添えられたパセリのように同性愛者が登場しなければなら
ないのでしょうか。「LGBTフレンドリー」(書評子はこの表
現も大嫌いなのですが)な現代台湾を描く上では、「欠かせない」
存在なのでしょうか? それならそれで正面から登場させて
ください。パセリ扱いにしないでください!―
と思わず辛口モードになってしまいました。両者ともに
歴史的大作の後には、必要なステップだったかもしれませ
ね。―こういう書評子の感想が的外れであるかどうかを確
かめるためにも、読者の方々には是非とも『冬將軍が来た夏』
を御一読いただきたいと思えます。季節はちようど冬。心温
まる物語を読むには絶好の季節でしょう。そして訳者白水氏
と白水社にはこういう意地悪書評には懲りずに、是非今後も
台湾文学の翻訳と刊行をお願いしたいと、臆面もなく願う次
第であります。

(たるみ・ちえ 横浜国立大学)